御陵衣祭を拝観して（続）

――その二　御陵衣祭と御霊会――

徳丸節子

一、はじめに

廿日市郷土文化研究会では、昨年六月例会の時に話し合って、地御前神社のお祭りである御陵衣祭を拝観することとなり、松中進会長はじめ数人の会員が参列いたしました。

会報「さくらお」123号に記しました内容と多少重複する面があるとは思いますが、地御前神社に関わる質問等を受けましたので、調べさせていただき、記述することにいたしました。

特に、この課題につきましては、私が所持している書物や図書館で調べましてもはっきりわからない点があり、専門家の方々のご指導をいただきました。

質問の中には、地御前神社に関わる伝説や御陵衣祭に上演される舞楽のこともありましたが、私自身の課題としても調べてみたかったのは、次の点でした。

「御陵衣祭」は、いつごろからどういうわけで「御陵衣」といわれるようになったのですか。

二、「地御前神社祭」と「御陵衣祭」

御陵衣祭に関わる文献等につきましては、大歳神社宮司である飯田元隆さんに伺ったところ、地御前には見当たらないということで厳島神社社務所の方へ問い合わせをしました。

私の問いに応じていただき、神社用箋（16字×24行）約十枚もの詳しい御回答と共に約三十枚もの資料（コピー）を添えて御送付くださいました。

御紹介いただきましたこととはいえ、日々非常にご多忙な中を、日時を費やして対応してくださったことに対し、何とも申しわけなく思い、その御誠意に対しましても、会報の「さくらお」に、私ができる限りのまとめをしなくてはならないと実感いたしました。

ご丁重にご回答いただきましたものすべてを、記述することは、スペースの都合もあり要約して紹介させていただきます。

「当社には、地御前神社祭を「御陵衣祭」と記した資料は残っておりません。

これは例えば、当社の管絃祭を、旧暦の六月十七日に行われる事から「十七夜」（じゅうしちや）と地元の方が呼ばれるように言わば俗称であって、正式な名称ではないからだと考えます。

確かに現代でも「管絃祭」を「十七夜」と呼びますが、神社の正式な記録には「十七夜」と記された史料が残っていないのと同じです。」

―ご回答　引用の一―

とあります。

三、「御陵衣祭」と「御霊会（ごりょうえ）」

一昨年七月中旬のことですが、私は妹の亡夫の法事で、東本願寺へお詣りし、その翌日有名な京都八坂神社の祭である京都祇園祭を拝観する機会がありました。

雨上がりだったのですが、大通りの左右にずらりと並んだ山鉾の見事な装飾、美しい垂れ幕、各商店会で取り組まれている販売の品々にも都らしい工夫がなされ、さすが祇園祭だと思いつつ、人の流れに混ざって歩いたことを思い出しています。

その祇園祭は、祇園御霊会（ぎおんごりょう）とも、よばれていることを後になって知り不勉強だったことを残念に思ったのでした。

従って、地御前神社祭と、京都祇園祭との関わりなど、考えてもなかったのですが、紹介されました資料によりますと、「昭和四十七年に、広島県教育委員会が発行した『厳島民俗資料緊急調査報告書』の中で、先代宮司の野坂元定氏の記された「管絃祭附居管絃祭」の中で、「京都祇園会の鉾や山の装飾を取り入れたのもその為である。季節柄この管絃祭を「御霊会に擬ちえる」といったことが、その起源だという。

―ご回答　引用の二―

とありますように、管絃祭の御供船についての美しい装飾に工夫が凝らされた意味合いが記されていることが分かります。

引き続いて「御霊会」につきましては、私が所持している書物の中に、故石田米孝先生著「廿日市の歴史探訪四」年中行事（19）P.142「御霊会」があり、下調帖によると、「五月節句ハ植付之時分ニ御座候得共、外宮社御祭礼神輿還御・流鏑馬・舞楽等御祭事賑敷ニ付他所ヨリ参詣之者モ多ク、客来等御座候ニ付家毎粽抔巻一同一日相休ミ御神事拝見ニ罷出申候」とあります。

―ご回答　引用の三―

厳島神社社務所の方から寄せられた文書の中に、